

国際交流セッション ー国を超えて働く技術者の交流ー

International session - The engineers working overseas

崔 瑛 (さい えい)
横浜国立大学 准教授

内村 太郎 (うちむら たろう)
埼玉大学 准教授

1. はじめに

“ダイバーシティ”の一環として、海外から来日して学び、日本での就職を考えている留学生、また日本から海外への留学や就職に関心のある方のための「国を超えて働く技術者の交流セッション」を企画した。留学生の採用に積極的な企業の方、日本の企業で働いている外国人技術者、海外で働いた経験のある日本人技術者の3名の方に話題を提供いただき、国を超えて働く面白さや難しさ、働くための心構えや条件等についてご講演をいただいた。パネルディスカッションでは、「国を超えて働く技術者」と題して、外国人が日本で、また日本人が海外で働くために必要なものについて討議を行った。

2. セッションの概要

本セッションは、大会初日の2019年7月16日午後10時に開催された。参加者総数は約70名であり、男女比は5:1程度で男性が圧倒的に多く、主に日本の大学院に在学中の留学生と、およそ10名の日本人学生にもご参加いただいた。以下に、セッションの様子について紹介する。

セッションの冒頭では実行委員の内村から、開会の挨拶と事前アンケートの結果を報告した。留学生の実態を明らかにするため、大会前に大学教員の学会員の指導学生にアンケートを実施し、49件の有効回答を得た。就職について、約59%の留学生が日本での就職を考えている。就職の一番のハードルについては、63%が日本語レベルの不足、18%が留学生の募集が少ないこと、約12%が日本での就職の仕方が分からないことを挙げていた。

柳英実氏（清水建設(株)）には、留学生の採用に積極的な企業の方として、「日本のゼネコンで働く外国籍エンジニア」を題にご発表いただいた。ご自身の会社を例に、

日本の建設会社における外国人の雇用形態、仕事の内容や求められるスキル等について紹介した。日本語の重要性を強調するとともに、現場や設計など業務に拘らず積極的に日本の会社で働くことを強く呼びかけた。

Lewis Benjamin氏（(株)大林組）には、日本の企業で働いている外国人技術者として、「日本で働く外国人：1年目の経験を振り返って」の題で、ご自身の日本への留学から就職、職場で経験についてご講演いただいた。入社2年目のBenjamin氏は、定例会議を例にアメリカと日本の文化に対する独自の見解を述べ、「異なる文化・習慣」を理解することの大事さを訴えた。

今井優輝氏（(株)不動テトラ）には、海外で働いた経験のある日本人技術者として、「海外業務を経て深まる地盤工学への理解」の題でご講演いただいた。ご自身が経験した、地盤材料の違いにより日本の技術がそのまま適用できない現場の話为例に、国外で働く難しさ、それを解決するためのプロセスや楽しさ等について述べた。

最後のパネルディスカッションでは、主に外国人が日本で働くための条件や、就職のプロセス等について質問があった。日本語の重要性が再確認されたほか、留学生の就職に関する情報不足など教育上の課題も見出された。また、海外への留学・就職希望のある学生に対しては、「Just go」という柳英実氏の言葉が、学生たちに力強いメッセージになったのではないかと考える。

3. セッションを終えて

本セッションを通じ、日本における留学生の就職については日本語のほか、文化に対する認識不足、情報の共有不足など教育上の問題も散見され、その中での学会の役割についても引き続き議論が必要であると考えられる。



写真-1 聴講の様子



写真-2 パネルディスカッションの様子
(左から今井優輝氏、柳英実氏、Lewis Benjamin氏)

(原稿受理 2019.9.17)